受賞に際して　　井波陵一

最初に読売文学賞受賞のお知らせをいただいた時、ふと思い浮かんだのは、高校時代、仮病を使って学校をさぼり、校舎と隣り合った寮の、だだっ広い寝室の二段ベッドに寝転んで『紅楼夢』を読んでいた情景だった。夢中になって読んでいたとはいうものの、日常の世界からずるずるこぼれ落ちていきそうな自分に恐怖感を覚え、それから目をそむけるために、いっそうがむしゃらに読み続けたのも確かだろう。授業中もせっせと「内職」に励んだ昔を振り返ると、「ホント、危なかったなあ」というのが正直なところである。

幸い『紅楼夢』にこだわり続けることのできる環境に恵まれ、中国あるいは文学といった分野とは異なる世界の事柄や人々からもいろんな刺激を受ける中で、全訳を試みる決意を固め、それを貫くことができ、しかもこのように高く評価していただいたことを、とても嬉しく思う。

中国の人々にとって、『紅楼夢』は最も魅力的で、心ときめく文学作品にほかならない。相手が大切に思うものを尊重し、理解しようとすることは、お互いの交流にとって何より重要だろう。中国文化の様々な方面、たとえばお茶や料理、調度や建築、詩や文章の作り方、果ては悪口の言い方に至るまで、拙訳を通じて読者の皆さんがそれらを味わい楽しみ、そこから中国文化全体について思いをめぐらせ、さらに、私たちの存在の拠り所でもある漢字文化のふところの深さを感じ取ってくださるとすれば、これほどすばらしいことはない。

『紅楼夢』は世界文学の中でどのような位置を占めるのか――その問いに見事な答えを与えてくれる人が、若い読者の中から現れることを心から願っている。